

系所組別： 台灣文學系

考試科目： 外文文學文獻解讀（日文）

考試日期：0219，節次：4

※ 考生請注意：本試題 可 不可 使用計算機

此考科可攜帶紙本字典入試場

## 一、試將下列日文文獻譯成中文。（25%）

探偵小説は、いかなる人間の側面を描くのか。探偵小説にこそ描ける、あるいは探偵小説が描くことを強みとする人間の側面というものがあるだろうか。まずは、こういう問いを立ててみよう。

だが、その前に、探偵小説と呼ばれるジャンルの範囲を定めておく必要がある。たとえば、犯罪に関わる謎を解くというパターンを含んだ作品をすべて探偵小説の範疇に加えるとするなら、その源はかぎりなく古い時代にまで遡らなければならない。セイヤーズの指摘によれば、探偵小説の原型は、東洋の民話集や旧約聖書中の物語にも見られるという。しかし、ジャンルとしての探偵小説は、やはり職業としての探偵が歴史上に誕生した時代に初めて成立したものと見るべきであろう。というのも、他人の秘密や罪を暴くということは、ふつうの人間が行うのと探偵が職業的に行うのとでは、重大な相違があるからだ。

（広野由美子『ミステリーの人間学』、2009年5月、岩波新書）

## 二、閱讀下列文章，並請針對難波大助の犯罪聲明文以及當時對這類犯罪者的處理方式說出你的看法。（25%）

難波大助が摂政・裕仁を狙撃したのは、1923（大正12）年の12月27日であった。その前日に、彼はいくつかの新聞や雑誌へ、テロの予告状をおくりつけている。自分は共産主義者として、摂政をうつという声明文である。

いったい、なぜこのようなことをマスコミに、うったえたのか。予審の取調べでそう問われた大助は、つぎのようにこたえている。

「私が新聞社へ手紙を出しました理由は、これまで皇族に対して危害を加えるものを往々狂人扱いにすることが、権力者の常套手段であることがうかがわれたので、私は決して狂人ではないことを証明するため、また一つは私はどこまでも共産主義者で、……

ということを証明せんがために新聞社に発送したのであります」（「予審調書」—岩田礼『天皇暗殺』1980年）

「狂人扱い」されるかもしれない。大助には、そんな予感があつた。だからこそ、それをさけるために、マスコミへ声明文を送りつけたのだという。じじつ、予審段階の当局は、大助=狂人説の立証に全力をあげていた。彼の予感の的中したのである。

（井上章一『狂気と王権』、1995年5月、紀伊国屋書店）

## 三、請翻譯一篇日本殖民時代臺灣文學雜誌上的文章（資料一）。（25%）

## 四、請翻譯一篇研究臺灣文學的文章（資料二）。（25%）

（背面仍有題目，請繼續作答）

系所組別： 台灣文學系

考試科目： 外文文學文獻解讀（日文）

考試日期： 0219 · 節次： 4

※ 考生請注意：本試題 可 不可 使用計算機

資料一

## 臺灣文學界の總蹶起

全島要塞化の叫びについで島民六百六十萬總蹶起の諸聲が擧がる。それ程迄に敵の不逞なる挑戦よりは露骨となり、本島侵略の氣配は濃厚になつて來たのだ。年少の學徒は舊臘以來幾度か學窓半にしてペンを棄て銃を執つて起つたが、最近にはまた多くの妙齡の婦女子が敢然として挺身隊に馳せ參ずるを見た。かねてより祖國將來の運命を雙肩に負へるの身たる事自覺して居た彼等として此の事ある、固より當然とは言へ、その志の烈しくしてその行の壯なる、萬人をして自ら感奮興起せしめずんば已まない。

四圍の情勢既に斯くの如し、豈ひとり文學者のみ何時迄も晏如たり得ようか。われら藝に決戰文學會議を開き、聖戰完遂の大業に協力すべき文學者の覺悟を示し文學報國の誓ひを固くしたのであつたが今や一日も速に攻防完備の態勢を整ふる事を必要とする事態に直面するに至つたので、われらは、茲にその決意を新にするのみならず、即刻これが實踐に極力努めざるを得なくなつた。

茲に於て乎、本誌は、遽に會員に檄を飛ばし、各自が今次の全島總蹶起の運動に、如何なる覺悟と方策とを以て參加せんとして居るかを問ふ事により、以て全島民の赤誠披瀝に呼應する所あらんとした。以下、掲ぐる所のものは、熱心なる會員有志の寄せられたる回答の抜萃である。事急であつたため、會員全部の聲を聴くの邊が無かつた事は遺憾であるが、而も本島文學界の第一線に立てる諸氏を略、網羅し得た事は編輯同人の窃に満足とする所である。（峰人）

系 所 組 別 : 台灣文學系

考 試 科 目 : 外文文學文獻解讀 (日文)

考 試 日 期 : 0219・節次 : 4

※ 考生請注意：本試題  可  不可 使用計算機

## 「奔流」

では、こうして書かれた「奔流」とはどんな内容であろうか。「奔流」の主な登場人物は語り手で医師の「私」、中学の国語教師である伊東こと朱春生、そして伊東の甥の林柏年の三人である。

## 資料二

医師の「私」は内科医の父の死去に伴い、十年間住み慣れた東京を離れ、三年前に故郷に帰って来た。大学付属病院の解剖学教室で研究を続けるという夢を捨てての帰郷であるだけに、内地での生活に対して「旅愁に似たあの狂暴な感傷」を持ち続けている。

ちょうどそんな時、患者として訪れた中学教師の伊東と知り合う。「私」は完璧な日本語を話す伊東が、実は本島人(台湾人)ではないかと思ひ、興味を持つ。そして、その勘が正しかったことを、やはり患者として訪れた柏年から聞き、喜びを感じる。

この「私」の伊東に対する共感に興味深い点であるので、その箇所を引用しておこう。

「やつぱりさうだったか」私は会心の笑みを洩らした。私の靈感が未だに衰へてゐない事に対する快哉よりも、この人の存在は私とは何とはなしに縁のつながりがあるやうな、いぶかしげな、だが明るい思念を追つてゐる渾とした喜びであつた。国文科を受け持つてゐる点といひ、内地人と寸分変わらないあの垢抜けてゐる点といひ、私はこんな本島人が郷土に居ることが、たまらなく頼もしいと思ひ、心の底から嬉しさが湧いて来さうであつた。

「私」の伊東への共感、伊東が台湾人であるにもかかわらず、完全に日本人化している点にあるといつてよいだろう。ということは、とりもなおさず「私」自身が伊東と同じほどに日本人化した存在であつたことを物語っている。「私」は日本に対して、次のような思いを語る。

十年間に互る私の内地生活は、決して楽しい思ひ出ばかりではなかつたが、私のほんとうの日本美を見出し、藁に包まれたやうな温い人間味に触れ、憧れ以上にもつと／＼高い理想に接したやうな精神を、根底から揺り動かしてくれる事柄を体験したのは、その間に於てであつた。自分は南方生れの一日本人として甘んずることが出来ず、純然たる内地人になりすまさねば気が済まなかつた。進んで内地化しようと努めるのではなしに、無意識のうちに内地人の血が自分の血管に乗り移り、それがいつの間にか静かに流れてゐるといつたやうな気持であつた。

しかし、「私」の日本人化には常に或る種の緊張が伴っていた。

私は内地に居た時分を思ひ出した。「御郷里はどちらですか」と訊かれた時に、いかなる心理の作用であらうか。大ていは四国か九州と答へた。なぜ私は言下に「台湾です」と答へるのを憚つたのであらう。だから私はいつも木村文六といふ仮り名を振り翳して行動せねばならなかつた。風呂屋へ行つても、おでん屋で飲んでも、この名で通した。そして一かどの内地人に成り済ましたつもりで、得意然と肩をそびやかして喋りまくるのである。たまにはべらぼうめ弁をぬかしては相手を眩惑した。だから郷土訛り丸出しの友人と一緒にゐる時は、台湾人だと感づかれはせぬかと、私はひやく／＼せねばならなかつた。そして愈々化けの皮が剝かれる時、私はリスのやうに逃げまはつた。私はかうして十年の間、絶えず神経を尖らして居たのであつた。

こうした「私」の心理は、まさに文化人願望でいうところの「バッシングー」である。